

報告番号

※

第

号

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

一九一〇年代における土田杏村の思想と人文科学

氏 名

川合 大輔

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、1910年代における土田杏村の思想を中心とする日本思想史研究を行うことによって、今日、人文科学と称されている学術領域の成り立ちを考えることである。

従来、近現代日本思想史研究では、その名称によれば、基本的には日本における知識人の思想の歴史を研究対象とするはずであるにもかかわらず、その知識人と称される集団の中でもっとも該当する人数の少ない人文科学領域に属する知識人の思想をもっぱら研究し、それをそのまま日本思想史研究と称してきた。このことは、おそらく今後も変わることはないだろう。問題なのは、研究で取り扱っている対象が、主として人文科学者、もしくはその領域の学問をおさめた知識人の思想であるということをはほとんど自覚することなく、ただちに近現代の日本思想史であると考えていることにある。実際において近現代日本思想史研究は、近現代における主として人文科学的見地による思想の歩みを考察する知的営みなのである。

それゆえ、今後の近現代日本思想史研究は、主として人文科学領域に属する知識人の思想が、これまでどのように時代と向き合ってきたのか、という問いに変えていかなければならない。そのようにしてはじめて、当時の知識人の思想と正しく向き合うことができ、その思想から学び、かつ反省をして、現在における人文科学領域に属する知見を豊かなものにしていけるのである。また、このように、主として人文科学領域に属する知識人の思想を研究するという大枠を定めることは、日本思想史研究者の間における共通の対話基盤がほとんど崩壊すると共に、日本思想史研究のアイデンティティが問われている現在の研究状況にあって、ひとまず議論を活発化させるための基盤をもたらすことにもなる。

そこで本研究では、現在において称されている人文科学という言葉が、まだ定着していたわけではないにせよ、史上初めて意図的に登場し、人文科学的見地と自然科学的見地との差異が強調された 1910年代を研究の時期範囲として設定し、人文科学的

見地を重んじながら文明批評を行った土田杏村の思想に主として注目したわけである。

本研究は、三部構成となっている。

第一部では、「土田杏村の初期思想」と題して、杏村の思想の原点を把握すると共に、文明批評家としての思想の萌芽がどのようにみられるのかを考察した。杏村の初期思想については、従来、研究そのものがあまりみられないし、先行研究では型どおりの言及がなされているだけである。これに対して本研究では、杏村が遺した作品を吟味し、思想的背景を考察することによって、杏村の思想の原点の特徴と、文明批評家としての思想の萌芽がどのようにあらわれているのかということ、正確にとらえた。

第二部では、「1910年代における思潮と土田杏村の文明批評」と題して、杏村が影響を受けたと考えられる高山樗牛と田中王堂の思想を考察すると共に、1910年代の思潮について考察を行った。また、その思潮に対する杏村の問題意識と、基本的な立場と見解を確認した。その結果、樗牛の思想に関する考察では、これまで知られていなかったルネサンスを文芸復興と和訳した経緯が明瞭となり、樗牛が文芸復興という和訳と人文の追究とを結びつけて考えていたことが明らかとなった。また、王堂に関する考察では、これまでほとんど知られていなかった王堂の哲学と同時代の評価を明示することができた。最後に、1910年代における思潮の典型例を考察することによって、現在にも通底する身近な問題が、その当時から存在していたことを明らかにできたと共に、知識人の存在意義が問われる時勢となってきたことが明瞭になった。そして、そのような時代背景において、杏村が何を問題にし、どのような立場と見解を示していたのかをとらえることができた。

第三部では、「自然科学本位の社会と人文科学の見地」と題して、本研究の目的である人文科学と称されている学術領域の成り立ちをとらえ、その文脈において土田杏村の思想を考察した。その結果、1910年代の後半では、もともと苦境に立たされていた人文科学系の学問が、さらに隅に追いやられる社会情勢となってきたことが明らかになった。その一方で、1910年代では、神秘をめぐる思潮が隆盛していたことと、その意味を明らかにできた。最後に、このような文脈において杏村が、人文科学の立場を、どのような理論をもちいて擁護しようとしたのかを明確に示すことができた。

以上、三部十章で構成された本研究の結論では、人間と称されているこの存在にまつわる諸問題を考えるために、自然科学的見地と共に人文科学的見地も養っていかなければならないということ、杏村の言葉をもとにして示した。それと共に、日本思想史研究が抱えている問題である共通の対話基盤の欠如を是正するために、人文科学領域がこれまでどのような歩みを見せてきたのか、という分析枠組みを共有することが有効になることを確認した。